

文章を評価する力を育てるために

— 第2学年における説明的な文章の学習を通して —

岩本和貴

1 取り組みの概要

低学年における学習は、国語科であれ何であれ、学び方の基本を身につける場であると考えている。どのように教材と向き合い、他人の意見と向き合うかを学ぶことができるようにしたい。その学習が、中・高学年において自分自身と向き合おうとする姿勢や能力に結びつくだろう。

私は、低学年の国語科の授業においては、特に教材と確かに向き合う力を育てることが最も大切であると考えた。教材と向き合い、自分なりの考えをもつことが、他者との学び合いの場を一層価値のあるものにしていくだろう。

そこで、昨年度の反省をふまえ、説明的な文章を評価する活動を通して、教材と向き合うことができるようにした。具体的には、国語科で数年前から継続して取り組んでいる課題解決的な学習の実践を中心とし、もう一度「課題づくり」の過程を見直した。文章を評価する能力が高まれば、設定する課題の質も高まると考えたからである。また、質の高い課題を設定する経験そのものも大切にしたいと考えている。

本稿では、教材の特質を生かした、より質の高い「課題づくり」の力を育てるための指導・支援の在り方について、具体的な実践を通じて述べていきたい。

2 質の高い「課題づくり」を目指して

(1) 今年度の取り組みの概要

今年度学習した説明的な文章教材は次の4つである。

- ① 「たんぼぼのちえ」(光村図書)
- ② 「じゃんけん」(光村図書)
- ③ 「おへそって、なあに」(光村図書)
- ④ 「ビーバーの大工事」(東京書籍)

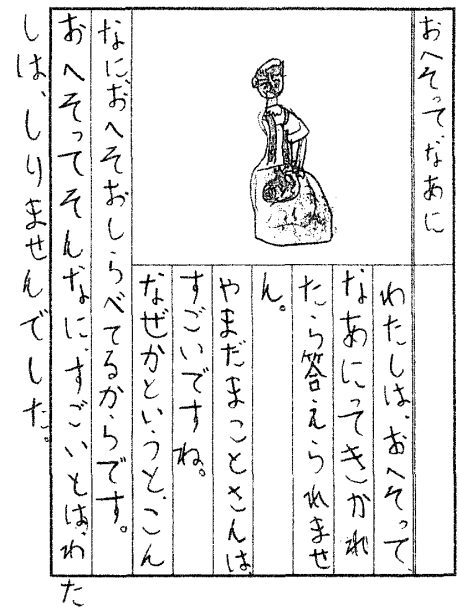
「ビーバーの大工事」は、「おへそって、なあに」で残された課題を解決するために設定した投げ入れ教材である(現在実践中)。

(2) 質の高い「課題づくり」のための支援

いずれの教材の場合も、初発の感想の中から「気づき」「なぜ・ふしぎ」「い見」「なるほど・すごいなあ」という観点で私自身が分類し、分類の観点に気づくことができるようにする方法をとった。これは、年間を通じ文学的な文章教材でも行った取り組みである。

「ビーバーの大工事」に取り組んだときには、どんな観点で分類すればよいか、自然に子どもたちが発言できるようになっていた。

また、「なぜ・ふしぎ」で挙げられた課題は多くの場合、文章内容(知識理解)に関わった課題であり、各自の調べ学習で解決し、発表した方が効率がよいことに気づいた。質の高い課題は、文章を読み込むことで解決すべき「なぜ・ふしぎ」であることも理解した。今年度は、ここで生まれた子どもたちの興味・関心を大きく広げ、深めることをねらって、単元の最後に「しらべ学しゅう



子どもの初発の感想

習形態は昨年度の取り組みの中で理解され、今年度定着したと言える。まず、教材文に限らず、文章を読んだら自分なりの感想をもつ、具体的には気づきや疑問、意見をもつ姿勢が育っている。低学年では知識的だけでなく学習方法でも、基礎的な力を身につけることが大切であるが（国語科の基本的な考え方参照）、自分の思いをもつように読む姿勢をもつことは、文章を評価する上では特に重要である。

現在の段階では、子どもたちだけで課題を設定することはできない。39人の思いをまとめるのは低学年の子どもには難しいことである。しかし、分類・整理の経験を繰り返すうちに、個人で解決すべき課題と、全体で話し合うべき課題の区別はだんだんできるようになってきた。両者の区分は、話し合いの中で理由をつけて意見が言えるようになった。

また、子どもたちは、多くの友だちが「すごいなあ」と感じていることを話題にするとよい、という気づきももつようになった。

「なぜ・ふしぎ」で挙げられ、「しらべ学しゅうタイム」で個人解決することにした内容は意外な成果を上げている。好奇心の強い本学級の子どもたちは、今や恒例となったこの調べ学習を楽しみにしており、教材文を読んで興味・関心をもったところを自由に調べている。その活動の中で、教材文では筆者が書ききれなかったところに気づく場合もでてきた。子どもたちは、「新しくわかったこと」として発表している。こんな内容を補充したらどうか、という思いをもつ子もいる。学習後、自分なりの課題を見つける能力につながることも期待している。

3 具体的な実践～「おへそって、なあに」の取り組みより

(1) 設定された課題を解く

設定された課題に対してどのような考察・話し合いをし、解いていくのかによって、「課題づくり」の過程のふりかえりが違ってくる。低学年の子どもたちは、教材のもつ課題についてどの程度まで考えを深めることができるのだろうか。ここでは、「おへそって、なあに」の実践を通して、子どもたちがより深く教材の本質に迫る課題をもつ姿を簡単に述べる。

(2) 単元について（概略）

筆者は、「おへそ」の「とても大切なはたらき」について、機能的な点から、親子やその先のつながりまでを意識して述べている。今まで学習した教材と比べ、論理構造は複雑である。「おへそ」についてどう説明しようとしているか、そのさまざまな工夫を学ぶ機会となると考える。筆者が、「おへそ」のはたらきとは何か、そのはたらきをどうとらえているかについて考えながら学習を進めることで、筆者の思いや論理構造に迫ることができるだろう。「おへそ」の「とても大切なはたらき」と、それにつながる各段落の言葉との関係を考え、整理できるようにしたい。

子どもたちは、説明的な文章の述べ方について課題解決的な学習を繰り返してきた。今回は、教材文を読む前に、「おへそって、なあに」という題名について自分なりに書いてみることで学習課題を設定し、筆者の認識と自分の考えを比べて考える手がかりとしたい。

(3) 指導目標

- 1 「おへそ」とは何かについて、筆者の考えを理解することができるようにする。
- 2 学習課題を手がかりにして、説明的な文章の述べ方について考えることができるようにする。
- 3 生命の発生や誕生の仕組みに興味・関心をもち、疑問に思ったことを自分で解決できるようにする。

(4) 指導計画（全11時間／本時 第二次第3時）

- 第一次 題名読みを行い、本文を通読する。…………… 3時間
第二次 各段落で何がどう述べられているのか、事柄の関係を整理して読む。… 4時間
第三次 「おへそ」とは何か、筆者の認識と自分の考えを比較する。…………… 1時間

第四次 調べてみたいと思ったことを自分なりの方法で調べ、発表する。……3時間

(5) 授業設計の焦点

子どもたちは初発の感想で、「おへそってとても大切なんだなあ」という思いをもつ者が多かった。これは、内容に引きずられた感想である。そこで、「おへその大切なはたらきって、なあに」という共通課題を設定し、「おへそ」そのものがどんな働きをしていると言えるのか、その矛盾に気づくことができるようにした。本時の学習は、「おへそって、なあに」という題名について考える上で、直接答えとなる部分である。筆者が「おへそ」のはたらきとして大切に考えているのは何か、どのように述べようとしているか、本文中の事柄について対応関係を考えることができるようにしたい。そうすれば、「おへそ」とはどの部分を指しているのかについて、子どもたちなりに疑問をもち、話し合うことができるであろう。

(6) 本時の目標

- 1 「おへそ」の「とても大切なはたらき」とは何か、理解することができる。
- 2 筆者の考えている「おへそ」について、自分なりの考えをもつことができる。

(7) 学習の展開

学 習 活 動	教 師 の 働 き か け
(前時) 生きていくために必要なこととして、何が行われているのか読みとり、まとめる。	
1 前時を想起する。 2 本時の学習課題を知る。	1 ・何について述べられている段落か、確認できるようにする。 2 ・子どもの作った学習課題との関連を、わかりやすく確認できるようにする。
「おへそ」の「とても大切なはたらき」って、なあに？	
3 「とても大切なはたらき」について3段落と6段落に書かれている内容をふりかえり、比較する。 4 筆者の言う「おへそ」とは、何を指しているのかについて考える。	3◎述べてある事柄ごとに色分けをし、構造について整理しやすい板書を工夫する。 ◎「おへそ」の「はたらき」は、何を通して機能しているのか、対象となる言葉を考える場をもつようにする。 4 ・挿し絵に注目できるようにする。 ◎第2段落の表現について考え、自分なりの意見をもつことができる場をもつことができるようにする。 ・胎盤についての指摘が出た場合は、文章の課題として考え、発展学習に生かせるようにする。
5 本時のまとめをする。	5 ・板書を使ってふりかえることができるようにする。
(次時)「おへそ」のはたらきとしての「つながり」について考える。	

4 実践のふりかえりと今後の取り組み（「ビーバーの大工事」の実践）

子どもたちは文章に対してより本質的な課題をもつことができた。実は、「おへそ」は働いていたわけでも、今働いているわけでもなく、働いていた「くだ」の「あと」に過ぎない。教材文の「おへそ」の「はたらき」は、いつの間にか「くだ」の「はたらき」の説明に変わってしまっている。子どもたちは学習過程4でそこに気づいた。「あれ、わからなくなった」「わかっていると思っていたのに……」というつぶやきには、文章を読み込んだ上で得ることのできた新たな疑問がある。教材の本質的な課題に迫ることのできる感想を中心に「課題づくり」をし、子どもたちをそこに「追い込んで」いった成果と言える。

しかし、筆者はどんな風に行けばよかったのだろうという主旨の発問をしてしまったために、子どもたちが混乱した。ひとつの授業の中に2つ目の大きな課題が出てきたことになるからである。本時では、教材の本質的な課題に気づくところまでにしておくべきであった。低学年の子どもたちにとって、教材文に対する大きな意識変化をしたばかりのところに、更に新しい課題を指導者から提示したのには無理があった。子どもたちのふりかえりの中にも、「むずかしかった」という声がいくつかあった。

この点をふまえ、追加教材「ビーバーの大工事」に取り組んだ。

「ビーバーの大工事」は、ビーバーの巣作りの特性について述べた文章である。擬音語・擬態語を多用し、巣作りの手順で論理展開し、まとめるなど、臨場感溢れる表現を目指していると言える。ただ、そこを重視するあまり、述べている事柄が前後したり、あちこちに散らばったりして、整理しにくいという課題もある。

「課題づくり」は、子どもたちの初発の感想をもとに行った。子どもたちの感想では、8割以上の子どもが「ビーバーはすごい」という驚きをもっていた。これも内容に引きずられた感想である。ただ、「なぜダムを作らなきゃならないの?」「(巣作りについて) めんどうなやり方だ。べつのやり方があると思う」など、文章の課題をとらえようとする姿勢のものもいくつかあった。

そこで、文章の課題に説明の順序に注目し、何について述べてある段落か意識することができるように学習を進めた。具体的な手だてとして、述べてある事柄で色分けした短冊を、述べてある順序で並べてみるようにした。

子どもたちは学習の中で、文章の論理構成の意図を予想しながらも、述べている事柄が散らばっていることにとどまった。わかりやすいつもりでいた文章が、段落ごとのまとまりとして整理しにくいことに気づいた。ここで新しい課題を設定せず、まず学習をふりかえって、筆者の意図と教材文の実態について、板書で比較し整理するようにした。子どもたちは、わかりやすく書くということの難しさについて感じることもできたようである。

この教材文をどのようにすればより良くなるか、説明の順序を変えるという点に絞って考えることができるようにしたい。